

青果物産地における帰郷就農とそのサポート源

—中国河北省張家口市 2 村の調査から—

共生基盤学専攻 共生農業資源経済学講座 農業経営学 劉 潤

1. 課題

改革開放以来、中国では都市部と農村部の所得格差が拡大した。高い賃金や生活の向上を求め、農村部の余剰労働力が都市部へ大量に流出する人口流動現象「民工潮」が続いている。一方、都市部での戸籍制度の制限、金融危機、農村のインフラ整備、郷鎮経済の発展などの要因によって農民工が出稼ぎを止めて故郷へ帰る「帰郷潮」も発生し、都市部に出ていた農民工が U ターンして地元で就職するケースが増加している。しかし、一般的な農民工の教育水準は低く、さらに農村部における就業機会が十分ではない。それ故に請負農地を用いて、農業を自営することが帰郷者にとって有力な選択肢の 1 つになる。ただし、帰郷後の就農は簡単ではなく、農業を開始するために様々な面からのサポートが必要である。そこで本論文では、河北省の青果物産地を対象に帰郷就農の実態と就農の際のサポート源を分析する。

2. 論文構成

1 章では、統計データや既存資料、中国政府による農業政策等を整理し、農村労働力流動の歴史的経緯と帰郷就農の現状を述べる。2 章では、中国河北省張家口市を調査地域に対象に、この地域の労働力流動と帰郷就農の現状を説明する。3 章では、張家口市における 2 つの村を取り上げ、農業と帰郷就農者の概況を述べる。4 章では、帰郷就農後の経営展開において受けたサポートとそのサポート源について事例分析を行う。終章では帰郷就農者の農業経営展開におけるサポートの意義、特徴、課題について論じる。

3. 結果と考察

本論文では、中国河北省張家口市の調査事例に基づいて、帰郷就農者の経営展開を分析し、それを支える様々なサポートの存在とその特徴について分析した。

第一に、中国の農民工の流動は「離土不離郷」時期および「離土離郷」時期を経て、近年は「帰郷潮」の発生によって特徴付けられる。一部の帰郷者が新たに農業を始めるものの、経営を軌道に乗せることができない場合が多い等、帰郷潮は新たな問題を発生させている。

第二に、河北省は中国の農業大省の一つで、北京市場に向けた農産物、特に野菜の生産量が増加している。河北省張家口市は北京市と天津市に近く、出稼ぎに向かう農民工が多い。この農民工の一部が、帰郷し就農している。そこで、本研究は河北省張家口市において、青果物産地である Z 県の A 村と G 県の B 村を対象として帰郷就農に関する調査研究を行った。

第三に、両村における帰郷就農の実態は異なり、帰郷就農者数にも差異が生じている。A 村では帰郷就農者の数が少なく経営の確立に困難を抱えていたが、B 村では積極的な帰郷就農者による農業展開が見られる。

第四に、就農初期及びその後の経営展開には、資金調達、土地確保、労働力確保、技術習得、販路確保、農業資材などの経営対応が必要である。B 村では帰郷就農者間のサポートネットワークが確認された。帰郷就農者間のサポートネットワークのキーパーソンはいち早く野菜経営を確立した帰郷就農者であり、彼の人柄と高い経営能力の貢献が大きい。このような帰郷就農者相互のサポートネットワークに加え、県政府の政策、農家間の友人関係と親戚関係も重要なサポート源であり、これら各種のサポートが相互関連性を有している。